

歴史学部 学部基幹科目（2019年度以降第1学年次入学者適用）

区分	科目名	履修開始メスタ	1	2	3	4	5	科目概要
			建学の理念に基づき、豊かな人間性と社会を支える広い教養を身につけている	歴史学の学修を通して、日本あるいは世界の個人・文化・社会に関する基本的な知識や技能を有している	個人・文化・社会などの多様性を理解し、自らの思考や判断に活かすことができる	学修の成果を用いながら、自らが設定した課題を考察することができる	地域社会や国際社会に内在する諸問題に関して、学修の成果を援用し課題を発見し、その解決に向けて実践的に取り組むことができる	
学部基幹	歴史学概論	1	○	◎				歴史学とはどのような学問なのか。歴史学とは、これまで高校で日本史や世界史を学んできたように、単に「歴史」を記憶に詰め込むことではない。歴史学とは、「歴史」に関する知識を獲得したうえで、考察し、その意義を考える学問である。本講義では、歴史学の基礎的な知識や考え方を学ぶことを通じて、「歴史」と歴史学との違いを理解する。
	外国の歴史と文化	2	△	○	◎			西洋文化圏やアジア文化圏では、日本の歴史や文化と、似ているところや、似て非なるところ、また全く異なるところがある。本講義では、日本以外の様々な世界の歴史や文化について初歩的に学ぶ。そして日本とは異なる外国の歴史や文化を理解し、その多様性を学修し、広い教養を身につける。
	歴史学とコンピュータ	2	○	◎				コンピュータの普及によりわれわれの日常生活は、様々な面で変容しつつある。人文科学系の学問研究分野においてもこうした傾向は同様で、研究に際してコンピュータをどう利用するかという問題は、どう研究を行うかと同義ともなり、避けて通ることができなくなっている。しかしながら、歴史学の分野に限ってみれば、研究資料（史料）のデジタル化が著しい進展を見せる一方で、研究全般ではコンピュータの導入が進んでいる部分とそうでない部分の違いが著しく、従来の方法と新たな方法を織り交ぜながら研究を進める必要がある。研究におけるコンピュータの利用は、研究を進める者自身が考える問題ではあるが、コンピュータを研究の「道具（ツール）」としてどのように用いるのか、その方法と問題点を知ることは研究を行う者が等しく考える必要がある。本講義では、研究の「道具（ツール）」としてコンピュータがどう利用できるのかを考え、歴史学研究に利用できるソフトウェアを知り、その操作方法を学ぶ。
	歴史文化概論	1 ※歴史学科は3セメ	○	◎				歴史文化とは、人々の日々の生活、つながり（社会）、環境（自然・経済・政治）を背景に、様々な時間軸のなかで、成立してきた文化事象である。また、文化とは、一般にイメージされる華道・茶道や芸術といった「伝統文化」のみならず、経済や政治によって創られた感性も含む。本講義では、歴史文化学科の3つの領域（地域文化・民俗文化・芸術文化）をもとに、さまざまな専門分野（考古学・地理学・地域史・民俗学・文化人類学・神話伝承学・美術史・芸能史）であつかわれる歴史文化について概説する。また、フィールドワークを通じ、現代に残る有形・無形のモノ（遺跡・街並み・生活文化・祭礼・芸能・芸術・神話・伝承・宗教）、ヒトの記憶・語りを通じ、具体的な事例から研究する歴史文化の基礎的視野や方法の重要性について学ぶ。
	日本史概論	1	○	◎				大学で学ぶ歴史学はこれまでの歴史の学習とは大きく異なるだけでなく、現在持っている歴史の知識も、これから始まる専門的な学修を考えた時に、決して十分とはいえない。この講義では、歴史学の基本的な考え方・方法に基づき、担当教員が日本史の各時代を理解するうえで重要と考えた事象を取り上げ講義する。講義の内容を理解するなかで、今後の専門的な学修に際して基礎となる日本史の知識を習得するとともに、学問としての歴史学の基本的な考え方や方法を理解する。
	東洋史概論	1 ※歴史文化学科は3セメ	○	◎				本講義では、東洋の歴史、とりわけ中国の歴史について、古代から近代まで大まかな流れに沿って学修する。中国は、古代から近代にいたるまで、日本の歴史と深いかわりを持ってきたが、その歴史や、培われてきた社会・文化は、日本とまったく異なる。中国における王朝ごとの基礎的な歴史用語の解説を進めながら、その王朝の歴史や文化の特徴を学ぶ。また王朝の移り変わりを理解し、中国史の概略を学び、歴史の多様性を学修する。
	西洋史概論	1 ※歴史文化学科は3セメ	○	◎				グローバルな関係性が張り巡らされた現代社会のなかで、西洋文明の理解は日本人にとって不可欠である。本講義では、その中核をなすヨーロッパ文明について、その形成期に重点をおきながら通時的に歴史を概観する。そうすることで、そこに生きた人びとの文化やものの考え方の特徴を学ぶ。加えて、講義中に紹介される史料の解説を通して、各時代と社会の具体的なイメージをつかみ、他者たるヨーロッパに対する理解を深める。
歴史地理学	2	○	◎				歴史地理学は過去の出来事や現象を通して地域の成り立ちや変化を考える地理学の一分野である。現代であれ過去のある時代・時期であれ、一つ一つの出来事・現象には生成し消滅する特定の時間（いつ）と空間（地域、どこ）がある。また、一つ一つの出来事・現象は、単独ではなく、他の出来事・現象と関係しあいながら生成・消滅している。そこで、この授業では地域の成り立ちや変化について、複数の出来事・現象を空間的に関係づけて考えることを重視して、講義を進めていく。	

歴史文化学科 専門科目（2019年度以降第1学年次入学者適用）

区分	科目名	履修開始semester	1	2	3	4	科目概要
			日本あるいは世界の歴史的な文化事象について基本的な知識と技能を有し、その重要性が理解できている	自らが専攻する分野・領域を中心に、歴史的な文化事象の時間的・空間的多様性について理解できている	日本あるいは世界の歴史的な文化事象に関する学修と現場での学修・活動の成果を統合し、その結果を言葉や文章によって論理的に提示できる	学修成果を用いて、現代の地域社会や国際社会に内在する諸問題について考えることができる	
学科基礎	入門ゼミ	1			○		歴史学科・歴史文化学科の教育内容を理解するとともに、大学で自律的に学ぶことを見通し、基本的な学び方を習得する。
	歴史文化研究法ゼミ1	3	○	◎	△		歴史文化の専門的研究に備え、少人数ゼミ形式で、歴史文化を研究するために必要とされる基本的工具（専門的な辞・事典、文献、地図、統計、モノ、その他資料等）について学修するとともに、それらを探索、収集する力を育成する。研究とは何か、研究に使用できる史資料を見極める力、それらを探し出す方法、それらを読解し、利用し、構築、説明する力を養う。研究に欠かせない多様な資料に関する基礎知識を修得しながら、文化の時間的・空間的な多様性を理解する力を養う。学生たちの専門的な学問分野に関する関心を養い、大学における学修目的を明確化する一歩とする。
	歴史文化研究法ゼミ2	4	○	◎	△		研究法ゼミ1で修得した研究のスキルをもとに、各受講者の興味、関心を発展させ、研究テーマを選び、深化させていく。特に、研究テーマを選ぶための文献資料等を具体的に収集し、それらを読み込み、まとめ、更なる研究課題へ展開するプロセスを実践的に修得していく。具体的には、3年次以降の本格的な卒業論文作成のための第1段階の研究計画を策定できる力を養う。
	地域文化概論	2	◎	○			地域文化に関する事象（地域文化の成り立ちや変化、地域文化間の関係など）を検討するには、歴史的に形成された地域文化の時間的・空間的多様性を理解することが必要である。この講義では、諸地域を歴史的に構成する条件（各時代・地域を特徴づける重要トピックス）を学ぶことで、現代世界における諸地域を単純化することなく、相互の関係の中で理解する能力を身につける。
	民俗文化概論	2	◎	○			民俗文化に関する事象（生活文化、祭礼、伝承、伝統的な制度・慣習の継承、異文化の理解など）を検討するには、歴史的に形成された民俗文化が持つ時間的・空間的多様性への理解が必要である。この講義では、日本あるいは世界の民俗文化（各時代・地域の重要トピックス）を学ぶことで、人々の営みと実践を単純化することなく、相互の関係の中で理解する能力を身につける。
	芸術文化概論	2	◎	○			芸術文化に関する事象（絵画、彫刻、工芸、舞台芸能、民俗芸能等）を検討するには、歴史的に形成された芸術文化が持つ時間的・空間的多様性、そして何よりもそれを生み出した思想や哲学の違いへの理解が必要である。この講義では、日本や世界の芸術文化（芸術思想、芸術観などの重要トピックス）を学ぶことで、個々の芸術を単体で捉えることなく、背景となる思想や文化の歴史的・空間的広がりの中で理解する能力を身につける。
	歴史文化臨地研修	2	◎	○			歴史的に形成された文化事象の深い理解には、臨地での実体験を伴った学修が効果的である。この講義では、歴史的な文化事象に関わる場所（古墳・遺跡、現存寺院・神社、史跡、歴史的景観、生業・祭礼の空間など）を教員とともに実地見学し、講義のみでは学修しにくい文化財や史跡の初歩的な観察方法を習得する。
	考古学	4	○	◎			考古学は発掘された遺物・遺構などの考古資料にもとづいて人類史を研究する学問である。文字で記された記録や文献をもとに研究する文献史学と並んで、考古学は歴史学研究の主要な方法である。この科目では考古資料を用いて歴史を復原する方法を習得することを目的とする。発掘された遺物や建物の跡などが、いつの時代の、どのような物なのかを特定し、その時代の生活や文化を解明していく方法と成果を具体的に示す。その過程で考古資料である遺跡・遺構・遺物などのもつ特性と意味を認識できる。考古学は文字を残さなかった時代や文書・記録に残らなかった事象の解明に有効であり、生活や文化を明らかにするために有益な考古学の特質と意義を理解するための基本的な方法と考え方を認識することを目指す。

区分	科目名	履修開始semester	1	2	3	4	科目概要
			日本あるいは世界の歴史的な文化事象について基本的な知識と技能を有し、その重要性が理解できている	自らが専攻する分野・領域を中心に、歴史的な文化事象の時間的・空間的多様性について理解できている	日本あるいは世界の歴史的な文化事象に関する学修と現場での学修・活動の成果を統合し、その結果を言葉や文章によって論理的に提示できる	学修成果を用いて、現代の地域社会や国際社会に内在する諸問題について考えることができる	
学科基礎	民俗学	3	○	◎			民俗学の学史と研究方法について講義する。まず民俗学史を繙き、柳田國男を中心とした民俗学の理念と方法、およびその課題について検証する。そこから民俗学と歴史学との相関性および相違点について考える。さらに現代の民俗学がいかなる対象を扱うことが可能なのかについて、できるだけ具体的に検討してゆきたい。本講義では、民俗学という学問体系が日本の近代思想の営みのひとつとして形成され、展開してきたことを理解するとともに、その後どのように展開し、さらに今後はいかなる展開が予想できるのかについて、加えて「民俗」とは何かについても、受講生自らが考える力を養うことを目指す。
	文化人類学	4	○	◎			文化人類学は、世界各地域においておこなわれた比較的長期で、且つ、主に住込み型フィールドワークデータをもとに、さまざまな文化の生成過程を研究する学問である。また、文化は政治や経済と結びつき、人々のなかに埋もれ、「当たり前」と思いこむ“常識”を創り出すものでもある。世界の文化を事例に、人間とは何か、文化とは何かを考える。一般的に異文化理解の学問といわれるが、異文化とは、必ずしも「外国の文化」ではない。自文化とは異なる時空間に生きる「他者」を理解することで、自らの文化を再考する営みでもある。本講義では、文化人類学の基本的理論、視点を、多様なトピックを通し理解し、歴史的に創り出された文化、社会、人間を考えることで、人間が本来有する可能性を発見していく。
	西洋芸術史	3	○	◎			西洋史分野の文献資料を補足するさまざまな補助資料のうち、美術・音楽・演劇などの芸術作品がもつ歴史学的意義は大きい。各時代を代表する様式や芸術運動はその時代精神と密接に関連しあっている。また、西洋芸術への理解は、日本や東洋の歴史文化の本質をとらえるうえでも、非常に大きな助けとなる。本講義では、西洋芸術の基本的な知識を修得するとともに、代表的な芸術作品を取り上げながら西洋史の流れとの関連を概観する。
	政治文化史	4	○	◎			政治文化とは、ある社会や社会を構成する人々に特有の政治認識・政治行動のパターンをいう。近年の諸研究において、日本の政治文化の特徴は、権威主義的性格、集団主義的、他者依存性、状況依存性、「場」の重視などと指摘されている。このような政治文化は、それぞれの時代の政治形態や文化と関連して醸成されたものであるといえよう。本講義では、日本の古代から中世への移行期である平安時代の政治と文化を取り上げて、政治と文化との関連性や日本の政治文化の特徴の一端を考える。
	フィールドワーク基礎論	3	○				歴史文化の研究におけるフィールドワークの理念と課題について学び、実際の準備から予備調査までの行程を実践的に学習する。具体的には、まず手法としてのフィールドワークが持つ長所と短所、および留意点について指摘し、現地調査に必要な資料収集、資料に基づいた事前準備の要点を座学で学ぶ。これにより、フィールドワークを自ら計画、準備、実施する能力を身につける。
	人文地理学 1	3	○	◎			人文地理学とは、日本・世界の各地域で展開されている人間の諸活動を論理的に考察する地理学の一分野である。この講義では、私たちが生活している現在の日本・世界の諸地域とそこに住む人々の社会、生活や生産活動の特徴を地理学的に理解するために、分布、移動や生産、流通、消費、さらに地域構造といった事象に焦点を当てて学んでいく。
	人文地理学 2	4	○	◎			人文地理学とは、日本・世界の各地域で展開されている人間の諸活動を論理的に考察する地理学の一分野である。この講義では、私たちが生活している現在の日本・世界の諸地域とそこに住む人々の社会、生活や生産活動の特徴を地理学的に理解するために、場所に関わる宗教、生業、文化、あるいは空間上に現れる社会的差異といった事象に焦点を当てて学んでいく。
	経済地理学	3	○	◎			私たちの日常生活は身近な地域からグローバルな広がりをもつものまでさまざまな経済活動によって支えられています。経済地理学はそうした経済活動が展開する地域を対象とする地理学の一分野です。この授業では、私たちが生活する地域がどのような経済活動と関わり、その経済活動が地域にどのような影響をもたらしているのかという点に重点を置きながら、前半では農業と工業という「産業」を中心に、後半では「地域」とくに都市・地域格差という視点からみた経済活動をとらえ、経済活動と地域の多様な関係を考えていきます。

区分	科目名	履修開始semester	1	2	3	4	科目概要
			日本あるいは世界の歴史的な文化事象について基本的な知識と技能を有し、その重要性が理解できている	自らが専攻する分野・領域を中心に、歴史的な文化事象の時間的・空間的多様性について理解できている	日本あるいは世界の歴史的な文化事象に関する学修と現場での学修・活動の成果を統合し、その結果を言葉や文章によって論理的に提示できる	学修成果を用いて、現代の地域社会や国際社会に内在する諸問題について考えることができる	
共通	発展研究ゼミ1	5		○	◎		2年次に履修した「歴史学研究法ゼミ」の成果をふまえながら、発展的に学ぶ科目である。先行研究の検索・参照、史料の読解・分析といった作業について、教員と学生とが議論を重ねることにより、問題点を明確化する能力を養う。
	発展研究ゼミ2	6		○	◎		卒業研究を見据え、史料を分析する力、先行研究を参照し論旨を構築する基礎的な力を養うとともに、その成果を自らの力でまとめる能力を高めることを目的とする。自らが設定したテーマに関する基本的な史料の分析を行い、教員と学生とが議論を重ねながら、卒業研究で取り組む課題を明確化する。
	卒業研究ゼミ1	7		○	◎		自らが設定した研究テーマにしたがい、自らが取り組む課題を明確化するとともに、研究に用いる主要な史資料の収集・分析を行う。教員と学生との議論により、卒業論文の基本的な構成の策定に取り組む。
	卒業研究ゼミ2	8		○	◎		自らが設定した研究テーマ、構成に基づき、卒業論文の主要な論点について、史資料の収集からえた知見をもとに、実際の論文作成を進める。教員と学生とが議論を重ねながら、自らの研究を学術論文として完成させることを目指す。
	卒業論文	8			○		3年生以降に履修した発展研究ゼミ、卒業研究ゼミでの学習内容をふまえ、学術研究遂行に関わる総合、総括的な成果の取りまとめを行い、自らの研究成果を学術論文としてまとめる。
学科専攻	地域文化基礎演習	3	◎	○			この講義では地域文化の成り立ちや変化、地域文化間の関係等に関わる文献を正しく読解する能力を養う。具体的には、地域文化に関わる学術書や論文を取り上げ、背景となる研究史の整理、問題設定、研究方法、論理構成、データの過不足などに注意して、文献を批判的に読解する基礎を学ぶ。
	地域文化演習1	4		○			この講義では地域文化に関わる事象について自ら研究テーマを設定し、リサーチ・クエスチョンを設ける能力を養う。具体的には、自らの関心に沿って地域文化に関わる先行研究の整理と紹介を行い、他の履修者からの質疑に回答しつつ、討論を重ねて自らの研究テーマを明確化する作業を行う。
	地域文化演習2	5	○	◎			この講義では地域文化に関わる事象について自ら研究テーマを設定し、リサーチ・クエスチョンを設ける能力を養う。具体的には、自らの関心に沿って地域文化に関わる先行研究の整理と紹介を行い、他の履修者からの質疑に回答しつつ、討論を重ねて自らの研究テーマを明確化する作業を行う。
	地域文化特講1	3		◎		○	本講義では、地域文化の成り立ちや変化、地域文化間の関係等に関する特定の研究テーマのもとに具体的な地域を取り上げて検討し、多様な観点から地域を特色付ける文化について考察する。これにより、地域文化を検討する専門的研究の視角や方法論を習得する。
	地域文化特講2	4		◎		○	本講義では、地域文化の成り立ちや変化、地域文化間の関係等に関する特定の研究テーマのもとに具体的な地域を取り上げて検討し、多様な観点から地域を特色付ける文化について考察する。これにより、地域文化を検討する専門的研究の視角や方法論を習得する。
	フィールドワーク演習（地域文化）	5		○	◎		地域文化を研究する際に用いるフィールドワークについて、基礎的な方法や技能を習得する。地域文化の調査目的に合致した調査方法を適切に選択し、実地に使用する能力を涵養する。これにより、地域文化研究のフィールドワークを準備し、基礎的調査方法や技能を実地に過たず実行する能力の獲得を目指す。

区分	科目名	履修開始semester	1	2	3	4	科目概要
			日本あるいは世界の歴史的な文化事象について基本的な知識と技能を有し、その重要性が理解できている	自らが専攻する分野・領域を中心に、歴史的な文化事象の時間的・空間的多様性について理解できている	日本あるいは世界の歴史的な文化事象に関する学修と現場での学修・活動の成果を統合し、その結果を言葉や文章によって論理的に提示できる	学修成果を用いて、現代の地域社会や国際社会に内在する諸問題について考えることができる	
民俗文化領域	民俗文化基礎演習	3	◎	○			人々の具体的な生活世界である民俗文化を調査研究するための基本的な方法論をエスノグラフィー (ethnography) や民俗文化に関する論文をとり上げ、輪読し、検討・考察する。民俗文化研究をする上での基本的な視点、調査方法、資料の分析方法、論理構成などに留意して検討する。それらを通し、環境と人々の生活世界、儀礼、信仰、それらを創りだす人と人のつながり、経済や政治などマクロな環境から生成される民俗文化の時間的・空間的關係性について理解できるようにする。民俗文化として扱われる多様な項目、テーマについても、基礎的視点を学ぶ。
	民俗文化演習1	4		○			民俗文化における特定のテーマを設定し、受講者とともに、文献を読み込み、あるいは、具体的な調査をおこない、相互にまとめた課題をディスカッションし、調査報告としてまとめていく。一つのテーマを深く探求していく作業を複数で分担し、短期間で完成していくことを通し、研究を完成させていくプロセスを疑似的に学ぶ。
	民俗文化演習2	5	○	◎			民俗文化に関する特定のテーマを設定し、関連の専門文献を読み込み、あるいは、具体的な調査をおこない、まとめた課題をディスカッションし、調査報告としてまとめていく。前半では、テーマに関連した研究論文を複数購読し、研究にかかわる問題意識を発見する視野を養う。後半では、先行研究を踏まえ、テーマをめぐる史資料を探求し、調査計画を立案していく。また、予備的調査をおこない報告書にまとめる。作業を個人、あるいは複数で分担し、小研究を完成させていく。
	民俗文化特講1	3		◎		○	日本および世界の民俗文化について、特定のテーマをとり上げ、多様な視点から講義する。本講義をとおして、とり上げられたテーマについて基本的知識を修得するとともに、民俗文化がどのように生成され、交流し、構築されていくものであるかを理解する。
	民俗文化特講2	4		◎		○	日本および世界の民俗文化について、複数の地域における民俗文化をとり上げ、多様な視点から講義する。本講義をとおして、とり上げられたテーマ、民俗文化について基本的知識を修得するとともに、民俗文化を通文化的、通時的に考察し、民俗文化がどのように時間的、空間的多様性や共通性をもっているか、その理論的視点を理解する。
	フィールドワーク演習 (民俗文化)	5	○	◎			民俗文化を研究する際に用いるフィールドワークについて、基礎的な方法や技能を習得する。民俗文化の調査目的に合致した調査方法を適切に選択し、実地に使用する能力を涵養する。これにより、民俗文化研究のフィールドワークを準備し、基礎的調査方法や技能を実地に過たず実行する能力の獲得を目指す。
芸術文化領域	芸術文化基礎演習	3	◎	○			アジア・日本を中心に、彫刻や絵画など造形作品といった有形、舞台芸能や民俗芸能といった無形の芸術文化を研究していくうえでの研究方法や研究工具の使用法、文献読解能力、資料の分析方法などを会得することを目的とし、基本的な知識を修得するとともに、芸術文化が生みだされ継承されてきた意味や背景の理解を深める。
	芸術文化演習1	4		○			アジア・日本を中心に、彫刻や絵画など造形作品といった有形、舞台芸能や民俗芸能といった無形の芸術文化について、現地における実見による検討 (鑑賞・見学など) やそのありかた、文献読解の方法を実践的におこない、受講生で討議しあい問題発見・課題解決の能力を育成する。
	芸術文化演習2	5	◎	○			アジア・日本を中心に、彫刻や絵画など造形作品といった有形、舞台芸能や民俗芸能といった無形の芸術文化について、現地における実見による検討 (鑑賞・見学など) やそのありかた、文献読解の方法を実践的におこない、受講生で討議しあい問題発見・課題解決の能力を育成する。
	芸術文化特講1	3		◎		○	特定の作品や地域、時代を対象としてテーマを設定したうえで、多角的視点から具体的な有形作品を考察し論じる。対象とする作品が生まれた時代背景や社会についても基本的な知識を学修し、研究の視角や方法論に対する知見も広め、作品鑑賞のありかたなども会得する。
	芸術文化特講2	4		◎		○	芸能その他の無形文化遺産について、テーマを設定したうえで、多角的視点から具体的な無形文化遺産を考察し論じる。対象とする無形文化遺産が生まれた時代背景や社会についても基本的な知識を学修し、研究の視角や方法論に対する知見も広め、無形文化のありかたなども会得する。

区分	科目名	履修開始semester	1	2	3	4	科目概要
			日本あるいは世界の歴史的な文化事象について基本的な知識と技能を有し、その重要性を理解できている	自らが専攻する分野・領域を中心に、歴史的な文化事象の時間的・空間的多様性について理解できている	日本あるいは世界の歴史的な文化事象に関する学修と現場での学修・活動の成果を統合し、その結果を言葉や文章によって論理的に提示できる	学修成果を用いて、現代の地域社会や国際社会に内在する諸問題について考えることができる	
学科専攻	西洋史基礎英語文献講読	5	◎	○			英米史に限らず、西洋史分野の文献の多くは英語で書かれている。そこで、本講義では、辞書の扱い方、パラグラフリーディングの仕方など、英語文献を読むための基礎的な技能を修得する。と同時に、より専門的な工具類を用いて用語・人名・地名を調べるなど、西洋史分野の文献を読むための技能も修得する。そうすることによって、英語文献に親しみ、卒業研究で英語文献も利用してみよう、という意欲を喚起する。
	西洋史発展英語文献講読1	6		◎		○	英語文献講読で培った批判的読解力を土台に、西洋史分野にかかる専門的な英語文献について、問題設定・研究史・史資料や事例の扱い方・論理構成などに留意しながら、その内容を正確に理解し、批判的に読解する力を養う。
	西洋史発展英語文献講読2	7		◎		○	英語文献講読で培った批判的読解力を土台に、西洋史分野にかかる専門的な英語文献について、問題設定・研究史・史資料や事例の扱い方・論理構成などに留意しながら、その内容を正確に理解し、批判的に読解する力を養う。
	西洋史史料講読（外書）1	6		◎		○	英語に限定せず、取り扱うテーマに応じてドイツ語やフランス語、古典語などの言語で著された史資料や論考を講読し、より高度な史料読解の力を養う。
	西洋史史料講読（外書）2	7		◎		○	英語に限定せず、取り扱うテーマに応じてドイツ語やフランス語、古典語などの言語で著された史資料や論考を講読し、より高度な史料読解の力を養う。
関連	伝統文化研修	3			◎	○	日本やアジア地域を中心に伝統文化を、座学と体験型学習によって、基本的な知識を修得するとともに、伝統文化に広がる様々なものの考え方について理解を深める。
	京都学研修	3			◎	○	平安遷都以来、長らく日本の首都であった京都の都市的発展や文化的特徴を、史跡や寺社仏閣、博物館、史料展示などを見学することを通じて学ぶとともに、現地調査に必要な基礎的知識や技術を修得する。
	文化財学特論	3		◎		○	文化財とは人類の文化的活動によって生み出された有形・無形の文化的所産であり、また文化財保護法の用語でもある。この科目ではとくに文化財保護法に基づく有形・無形・民俗・記念物・文化的景観・埋蔵文化財などについて、種類・調査・研究の方法、文化財保護の仕組み、保存・活用などについて具体的に説明する。これによって、文化財保護法に規定された文化財の意味と文化財の保存・継承と公開・活用との相互の関わりについて考える能力を練磨する。その上で、文化財への接し方を認識することによって、これらを活かして受講生各自の社会生活をより豊かでゆとりあるものにすることを目指す。
	京都学入門	5	◎	○			1000年の歴史をもつ京都は、常に歴史の中心という個性をもっている。このことは常に新たな文化や芸能を生み出す街という性格・土壌をもっていることを意味する。本講義では、京都の歴史や文化を学ぶ入門的内容として、京都の通史とその時代の文化の特徴を学修する。
	京都学演習	6	○	◎			1000年の都、京都に関する歴史や文化などを探求するPBL型授業である。京都に関する個人で課題を設定し、その課題に対する探究をすすめ、課題解決を導き出し、その成果を発表したうえで、京都理解を進めるものとする。
	地誌学1	3	○	◎		△	地誌学とは、自然現象（地形・気候・水文など）と人文現象（都市・経済・歴史・交通など）の相互関係を総合的に考察し、地域的性質をとらえる地理学の一分野である。この講義では、様々な地理学の議論を導き、日本や世界各地の自然と文化の相互作用について学ぶことで、グローバル化する現代世界でそれぞれの地域を単純化することなく理解する能力を身につける。
	地誌学2	4	○	◎		△	地誌学とは、自然現象（地形・気候・水文など）と人文現象（都市・経済・歴史・交通など）の相互関係を総合的に考察し、地域的性質をとらえる地理学の一分野である。この講義ではある地域の特徴を自然環境、歴史、文化、政治、経済など様々な観点から総合的に理解した上で、現在の世界的な課題や国際情勢の中に適切に位置付ける視点の獲得を目指す。
自然地理学1	3	○	◎		△	自然地理学とは、地球上の自然環境を構成する諸要素を総合的・有機的に捉える地理学の一分野である。この講義では、日本や世界各地の地形、気候、水文、植生、土壌等に関わる自然地理学の基礎知識を正しく理解し、地球上の自然環境を総合的・有機的に説明する能力の獲得を目指す。	

区分	科目名	履修開始semester	1	2	3	4	科目概要
			日本あるいは世界の歴史的な文化事象について基本的な知識と技能を有し、その重要性が理解できている	自らが専攻する分野・領域を中心に、歴史的な文化事象の時間的・空間的多様性について理解できている	日本あるいは世界の歴史的な文化事象に関する学修と現場での学修・活動の成果を統合し、その結果を言葉や文章によって論理的に提示できる	学修成果を用いて、現代の地域社会や国際社会に内在する諸問題について考えることができる	
関連	自然地理学2	4	○	◎		△	自然地理学とは、地球上の自然環境を構成する諸要素を総合的・有機的に捉える地理学の一分野であるが、環境の要素には人間もまた含まれる。この講義では、防災や持続可能社会などといった環境との関わりで人間が直面する問題を通じて、日本や世界各地の自然環境と人間との相互作用的関係を理解し、説明する能力の獲得を目指す。
	英語文献講読1	4	◎			○	歴史にかかる英語文献について、問題設定・研究史・史資料や事例の扱い方・論理構成などに留意しながら、その内容を正確に理解し、批判的に読解する力を養う。
	英語文献講読2	5		◎		○	歴史にかかる英語文献について、問題設定・研究史・史資料や事例の扱い方・論理構成などに留意しながら、その内容を正確に理解し、批判的に読解する力を養う。
	ワークショップ実習	5	△	○		◎	本講義は、展示やワークショップなど歴史に関わる実際の社会発信の場を題材にした実践的な科目である。担当者と学生とが、共同作業を通じて問題解決の手立てや成果の発信などについて考えることにより、知識の実践的な活用方法や成果の提示方法について学ぶ。
	フィールドワーク発展演習（地域文化）	6	△	○		◎	地域文化を研究する際に用いるフィールドワークについて、やや専門的な方法や技能の実践について具体的に学習する。個々の方法や技能が明らかにする対象やその背景となる調査の目的の理解を目指す。地域文化研究のフィールドワーク全般に用いる調査方法や技能を対象として、方法と目的、何を明らかにするか、などを認識し、把握することを目指す。
	フィールドワーク発展演習（民俗文化）	6	△	○		◎	民俗文化を研究する際に用いるフィールドワークについて、やや専門的な方法や技能の実践について具体的に学習する。受講者は、卒業研究において、フィールドワークを行なうことを想定、あるいは、すでにおこなっていることがのぞましい。個々の目的にあわせてフィールドワークの計画を立案し、そのための方法や技能を探究する。民俗文化研究のフィールドワーク全般に用いる調査方法や技能を対象として、方法と目的、何を明らかにするか、などを認識し、把握することを目指す。また、すでにフィールドワークを行なっている者は、そのデータ等を発表し、調査対象やその背景となる文化・社会的要因の理解を深化させ、再調査に必要な視点を滋養することを目指す。
	フィールドワーク発展演習（芸術文化）	6	△	○		◎	芸術文化を研究する際に行うフィールドワーク（鑑賞・見学）について、より専門的な方法や技能に関して、具体的に学習する。有形・無形の芸術文化の調査目的や方法、技能の理解とともに、それらを用いて、具体的に個人テーマを設定し、課題に取り組み、報告としてかたちとしていく。
	日本史特論	2	◎	○			日本史概論の学修を通じて日本史各時代の最低限の知識を身につけ、歴史学（日本史学）の基本的な考え方・方法の一端に触れた。本科目では、もう少し専門的な内容に踏み込み講義する。時代によって取り上げる問題や内容は異なるが、日本史の各時代を理解するうえで基礎となる重要事項であることに変わりはない。講義の内容を理解し知識を広めることに加え、専門課程での学修を見据え、複数の事項を関連づけたり、背景を考えたりするなどして、歴史学の考え方や方法の基本となる思考に触れてみて欲しい。
	東洋史特論	4	◎	○			本講義では、中国・朝鮮・日本を中心に、古代から近代までのその交流や交渉の歴史を概観する。日本と海を隔てた中国や朝鮮とは、古代から深い交流の歴史が存在した。主に日本史の範疇で学んできた金印の時代から、遣唐使や日宋貿易、また倭寇や琉球のことなどを学ぶ。そして日本も「東洋」の一環であったことを理解し、アジアの歴史に対する多様なまなざしを身につける。
西洋史特論	4	◎	○			私たちにとはごく日常的な事柄のなかにも、実は近代以前にはありえなかったものが数多くある。そこで本講義ではヨーロッパにおける「近代化」の歴史を学ぶ。受講生は世界史の大きな流れを意識しつつ、近代ヨーロッパ社会における文化面での変化の意味について考える。	
史学史	3	◎				○	わが国における「歴史学」の歩みは、古代以来の歴史叙述の伝統と新たにもたらされた「近代歴史学」の融合のなか形成されてきた。本講義では、「近代歴史学」がもたらされた明治時代以降のわが国における学問としての歴史学の歩みをたどりながら、歴史学の特徴を理解するとともに、歴史学の未来を考える。

区分	科目名	履修開始semester	1	2	3	4	科目概要
			日本あるいは世界の歴史的な文化事象について基本的な知識と技能を有し、その重要性が理解できている	自らが専攻する分野・領域を中心に、歴史的な文化事象の時間的・空間的多様性について理解できている	日本あるいは世界の歴史的な文化事象に関する学修と現場での学修・活動の成果を統合し、その結果を言葉や文章によって論理的に提示できる	学修成果を用いて、現代の地域社会や国際社会に内在する諸問題について考えることができる	
関連	日本文化史	4	○	◎			日本の文化は古くから、東洋、中でも中国・朝鮮を中心とする東アジアの文化の影響を受けている。本科目では、日本文化のありようを、さまざま観点から概観し、その歴史的背景を学ぶことによって、その基礎的な知識を修得するとともに、中国・朝鮮半島の文化との関連性も理解する。
	東洋文化史	3	○	◎			日本の文化は古くから、東洋、中でも中国・朝鮮を中心とする東アジアの文化の影響を受けている。本科目では、東アジアを中心とする東洋文化のありようを、さまざま観点から概観し、その歴史的背景を学ぶことによって、その基礎的な知識を修得するとともに、日本文化との関連性も理解する。
	西洋文化史	4	○	◎			日本社会がヨーロッパ文化の影響を受け、その価値観や生活習慣などを共有するようになって久しい。そこで、本講義では、前提となる欧米文化のありようをさまざまな観点から概観し、その歴史的背景を学ぶことによって、西洋文化についての基本的な知識を修得するとともに、その多様性についての理解を深める。
	日本思想史	3	○	◎			日本の思想は、いずれの時代においても、また貴族の文化であれ、庶民の文化であれ、仏教の影響を受けている。本科目では、日本思想のありようを、仏教との関わりという観点から概観し、その歴史的背景を学ぶことによって、その基礎的な知識を修得する。
	東洋思想史	4	○	◎			東洋思想の中で日本の思想に大きな影響を与えたのは、仏教・儒学、そして道教がある。これらの思想的展開を中心として、思想の発生から現代への思想的変遷を概観する。これによって、東洋思想の基礎的な知識を修得するとともに、思想的影響関係も理解する。
	西洋思想史	3	○	◎			民主主義、自由・平等など現代日本において是とされる価値の源泉の多くは、ヨーロッパ思想にある。しかしながら、そのヨーロッパ思想も決して一様ではない。そこで、本講義では、さまざまな西洋思想のなかからいくつかの思潮を取り上げ、育まれた時代や社会のありように留意しながら概観する。これによって、基本的な知識を修得し、世界に広がる様々なものの考え方についての理解を深める。
	東北アジア史	4	○	◎			日本をふくむ東北アジア（中国大陸や朝鮮半島、および日本列島など）は、古来より密接な関係をもって歴史を歩んできた。本講義では、東北アジアにおける諸国・諸地域の歴史について取り上げ、その歴史的関連性について学修する。
	社会経済史	3	○	◎			前近代社会と近代社会は仕組みが異なっている。また世界の各国各民族で社会の構造や経済の仕組みが、それぞれの歴史に規定されて異なっている。前近代経済史は近代とは異なる論理が働く経済をあつかう歴史である。近代の立ち場からすると非合理にみえる現象も、それぞれの時代の論理では合理性をもつ。近代を相対化し自由な思考を養う上で前近代を知ることの意味は大きい。そのことを貨幣経済を題材に論述する。近代と前近代の違いと同時に、日本と中国、西洋の間にも大きな違いがある。中国前近代を主に論述するが、常に近代や日本・西洋と比較し、その違いが具体的に分かるように配慮する。
	交渉・交流史	4	○	◎			日本や世界の歴史は、決して一国内で完結するものではなく、他の国々・諸地域との交渉や交流のなかで培われてきた。本講義では、歴史上の多国間あるいは諸地域間の交渉や交流（交易なども含む）について取り上げ、歴史上における交渉・交流の役割を考える。
	宗教文化	4		◎		○	アジアの宗教特に仏教が生み出した文化の諸相とその背景にある仏教思想
	和装の文化	3				○	「きもの」独特の様式・色目・文様は、どのようにしてつくられてきたのか、出来るだけ現物や資料を見ながらきもの奥深さを学びます。きものとの関わり深い茶道や能・歌舞伎などのきもの着こなしにも注目してみます。実際に歌舞伎の舞台に立られている三味線奏者の方のスケジュールが合えば教室に来ていただきお話を聞いたり演奏も聴いてみましょう。現代のきものと礼儀作法やマナーについても考えてみましょう。
	法律学概論1	1				○	人が集まり、社会と言う集団が作られるとき、そこにはルールが発生し、それが「法」と呼ばれるようになる。この授業では、私たちの生活に対するルールとして機能する基本的な「法」を紹介する。その上で、現行法制度の紹介にとどまらず、その限界事例での法的な考え方について解説したい。

区分	科目名	履修開始semester	1	2	3	4	科目概要	
			日本あるいは世界の歴史的な文化事象について基本的な知識と技能を有し、その重要性を理解できている	自らが専攻する分野・領域を中心に、歴史的な文化事象の時間的・空間的多様性について理解できている	日本あるいは世界の歴史的な文化事象に関する学修と現場での学修・活動の成果を統合し、その結果を言葉や文章によって論理的に提示できる	学修成果を用いて、現代の地域社会や国際社会に内在する諸問題について考えることができる		
関連	法学概論 2	2				○	人が集まり、社会と言う集団が作られるとき、そこにはルールが発生し、「法」と呼ばれるようになる。そうした「法」により規律される空間においても限界事例が生じる。このような限界事例において、憲法上の権利がどのように機能しうるのか、という点について取り扱う。もっとも、授業時間の制約上、すべてを網羅的に取り扱うことはできないが、できるだけ身近な問題を取り上げながら授業を進める予定である。	
	国際政治学	1				○	国際社会における国家の政策や安全保障などの国際政治の歴史を踏まえ、国際政治学の概念や理論を学ぶ。また、これらを踏まえた現代の国際問題を考察する。	
	哲学概論	2				○	哲学は一見、抽象的な議論のつらなりであるが、議論は日常の経験に根ざしている。哲学の主要な議論を生活空間のなかから理解していくことがこの講義の目的である。20世紀の現象学や解釈学の立場を軸としながら進みたい。①哲学と日常性②物との関わり③人間と空間④歴史と風土	
	宗教学概論	1				○	宗教の本質については様々な見解が見られるが、これらを紹介しながら分析する。近代哲学はカントによる魂の実体性の否定によって、一つの頂点を迎える。この、キリスト教神学による魂不滅の信仰への痛打が、どう受け止められたかを中心に考察を進めていきたい。①宗教の定義②物との関わり③人間と空間④歴史と風土。	
	倫理学概論	1				○	西洋では多様な倫理思想が生まれたが、ここでは19世紀、デンマークの哲学者、キェルケゴールの思想を分析する。キリスト教神学や近代哲学がどのように彼の思想に関連するかを考察しながら、現代におけるその有効性を問うてみたい。①倫理学とはなにか②キェルケゴールの生涯と著作③道徳哲学者としてのキェルケゴール④近代哲学のなかでの位置づけ。	
	博物館学Ⅰ	3	◎			○	現代社会において、社会教育施設から生涯学習施設へ、教育行政から文化行政へと移行する博物館は変革のときをむかえ、博物館の意義と役割がとわれている。これまでの「博物館」の歩みを確認して博物館の役割や機能などを紹介し、現代社会が求める博物館像を検討する。	
	生涯学習概論	2		自由科目のため、 以下、該当DPなし				「学校教育」という発想、子どもへの「教育」という従来の狭い「教育」の発想を拡張し、「生涯学習」という関心からさまざまな「教育問題」を理解できるように導く。学習の場や機会が多様であること、生涯各期の特性に応じた支援が必要であることが理解できる。
	博物館学Ⅱ	4						博物館学芸員が展覧会や催し物などから、博物館史資料等を含めてさまざまな情報を発信することは、博物館運営の低迷を回避させる一助となるが、その情報提供の仕方の重要性を学ぶ。具体的かつ実践的な運営を通して現代社会における博物館の活動を認識する。
	博物館学Ⅲ	5						博物館の社会的役割を意識しながら、学芸員の最も基本的な仕事である文化財保護や博物館資料の取り扱いについて学ぶ。さらに、展示の具体例や普及活動などを国内の事例から解説する。また毎回、世界遺産や諸外国の博物館事情などトピックスを映像で紹介し、この分野への視野を広げていく。
	博物館学Ⅳ	3						博物館資料保存に関して、基本的理念や法的環境を学んだ後、資料の保存や修復方法、資料の保存環境、生物被害などの資料の劣化など、資料保存に関する具体的な方法を理解し、最後に資料保存をとりまく社会的環境について理解を深める。
	博物館学Ⅴ	4						展示は博物館の基本的機能であり、展示を知ることは博物館の活動の基幹を理解することにつながる。よって、本講義では博物館における展示についての概念を示し、展示の歴史を通覧したのち、展示に関する実践的な方法を学ぶ。さらに展示環境と設備や展示解説などの展示に関する基本的な事項の理解を深める。
	博物館学Ⅵ	5						博物館の主要な機能として位置づけられる教育について、歴史をふまえつつ、実際の学芸員の活動と具体的な方法を学ぶ。そのために近年、課題となっている博物館と学校の連携、ワークショップ・ハンズ・オン・アウトリーチや具体的方法について説明し、実際の教育の事例によって博物館における教育に対する理解を深める。
博物館実習講義	6						美術工芸品・古文書・考古資料・民具など、博物館の内外で学芸員は多岐にわたる資料と向き合う。それぞれの資料について基礎的な見方とともに、その取り扱いに関する留意点を具体的に解説する。	

区分	科目名	履修開始semester	1	2	3	4	科目概要
			日本あるいは世界の歴史的な文化事象について基本的な知識と技能を有し、その重要性が理解できている	自らが専攻する分野・領域を中心に、歴史的な文化事象の時間的・空間的多様性について理解できている	日本あるいは世界の歴史的な文化事象に関する学修と現場での学修・活動の成果を統合し、その結果を言葉や文章によって論理的に提示できる	学修成果を用いて、現代の地域社会や国際社会に内在する諸問題について考えることができる	
関連	博物館実習Ⅰ	7					現在、博物館運営は次第に困難な状況下におかれている。同時に学芸員も同じ状況にある。その中で、学芸員は十分に各機能を発揮させることは言うまでもないが、もっとも大切な博物館史資料等をどのように「取り扱うか」を、史資料の取り扱いの実技から会得する。
	博物館実習Ⅱ	7					博物館学芸員の専門的業務とその内容として資料の収集、整理、保存、展示を実地に体験し、理解を深める。特に学芸員としての資料の取り扱いの注意点や、技能については専門的知識の習得とともに練磨していく。
	博物館実習Ⅲ	8					現代の博物館運営と博物館学芸員は困難な状況下に置かれている。このような状況で博物館学芸員は十分に各機能を発揮させることは言うまでもないが、それ以上に重要な業務である博物館史資料等を安全に「取り扱うか」が必須であることを考えていく。
	視聴覚教育メディア論	3					視聴覚教育の発展は、博物館や美術館を含む、広い分野における「教育」に多大な影響を及ぼしてきた。情報機器（伝達手段＝メディア）の進展は、そうした影響をさらに大きくしている。しかし、その一方で、「視聴覚教育とは何か？」という問題が複雑化したことも事実である。本講義では、視聴覚教育の歴史的展開を、技術史と併せて紹介することを通じて、視聴覚教育のあり方や本質について学ぶ。そして、各自が視聴覚教育の実践への活かし方を考えることに取り組んでもらいたい。